

「かえるランド」から「いきものランド」へ

大場幼稚園（静岡県三島市）

[5 歳児]

ねらい・・・身近な小動物を通して親子で感動を共有しながら、生き物への興味・関心を高め、命の大切さを知る。

配慮点

考察

< 2008年度「かえるランド」事例 >

http://www.sony-ef.or.jp/preschool/webmagazine/webmag_jirei/jirei72_01.html

- ・前年度の体験を思い出して生かし、日常の中で継続的に小動物に触れ合う時間を大切にする。
- ・生き物との触れ合いの中で生まれた疑問や驚きを受け止め、図鑑を使って調べたり互いに知っていることを伝え合ったりする。五感を通して感動が表現できるように、子どもの感動を遊びに取り入れる。
- ・昆虫など身近な小動物が苦手な母親や、子どもの頃に小動物と触れ合う機会が少なかった母親が増えている。家庭に帰った時や将来にわたって、身近に子どもの感動を受け止める大人の存在が大切なので、日常の保育の中でも、親が子どもと共に感動を共有できるかわり方の工夫をする。
- ・小動物と触れ合った後は、しっかり手を洗うことを教えていく。



園庭のダンゴムシ探しが盛んになる。

A子が「前に、大きい組さんがやってくれた“かえるランド”楽しかったね」と、園庭を回りながら話し出す。他の子も「うん、面白かった。先生、またやろうよ」という声がかかる。「それでは、皆でどんな楽しい所にするのか、また考えておいてね」と、投げかける。

いきものランドを作ろう！！

- ・子どもから出た「かえるランドが楽しかった」という思いを発展させて、今年度、毎日飼育した小動物たちの楽しい遊び方を皆で考えて「いきものランド」ができるように投げかける。
- ・お家の方と一緒に作った「いきもの図鑑」を生かせるコーナーを作り、自分たちが調べて得た知識を、4歳児にも伝達できるようにする。
- ・係の分担は自分で選び、遊び方や小動物について自信をもって4歳児に話せるようにする。

池を作り、紙で制作したザリガニを池の中に入れる。



- C 「ザリガニの足って、どうやって付けるの？」
- C 「本物を見ればいいよ。ほら（ザリガニを持ち上げて見せる）」
- C 「ザリガニの体ってよく曲がるね。線がたくさん付いているよ」
製作していてわからなくなると何度も本物のザリガニを見に行く。
- C 「あれ。作ったザリガニを入れたら、本物のザリガニが怒ったよ。ほら、ハサミを上げている」
- C 「本当だ。ハサミを上げたり、後ろに下がったりするよ」
翌朝、ザリガニが死んでしまう。
- C 「昨日みんなが作ったザリガニで脅かしてしまったから、疲れちゃったのかな？」
- C 「きっとそうだよ。ザリガニさんごめんね」お墓を作って謝る。

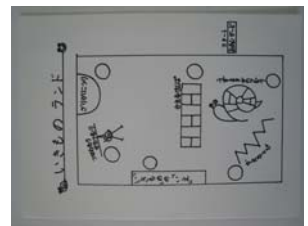
カタツムリの渦巻きけんけんをビニールテープで色付けする。



- C 「カタツムリもきれいなのが好きだね」
(ビニールテープを貼る)
- C 「そうだね。すごくきれいにしてあげるときっと、喜ぶよ」
- C 「カエル跳びは難しいかな？卵から、順番に跳ぶようにしよう」と、自分達が跳んで確かめながら、コーナーを作る。

いきものランド地図

4歳児が迷わないように地図を作り、
C 「いきものランドに来てください」と、渡しに行く。
回ったコーナーごとに、5歳児の係の子がシールを貼る。





4歳児に渡すお面を作る

- 「かえるランドの時はお面があったから、生き物のお面を作ろう」
- 「僕はザリガニがいいけど、さくらさんは何がいいかな？」と、考えながら、色塗りをする。

- ・昨年度の経験から、「かえるランドをやりたい」という子どもたちの声が聞かれたので、今年度は更に小動物との触れ合いの幅を広げて、「いきものランド」に発展することができた。
- ・園での子どもの感動や、日常の子どもの言葉を受け止める家庭環境も大切であると考えて、図鑑作りを通して親の参加の場を設けた。小動物が苦手な親も、子どもと共にじっくりと小動物に向き合う体験ができ、いきものランドの「いきものコーナー」での遊びに生かされた。

「いきものランド」受付



いきもの展示コーナー
生き物博士が説明する



いきものランド

皆で作ったいろいろな「いきもの」のお面を並べて4歳児を迎える。
○「いらっしやいませ。どのお面がいいですか？」
4歳児も真剣にお面を選ぶ。お面をかぶってよいよ「いきものランド」へ入場する。

ザリガニ釣りコーナー



カタツムリの渦巻き
けんけんコーナー

カタツムリの綱渡りコーナー



- ・2年間を通して、日々の小動物との触れ合いの積み重ねや前年度の5歳児とのかかわりの経験が、子どもの感性や小動物に対する興味・探究心を深めるために重要だと感じた。
- ・幼児は、ダンゴムシや抜け殻集め・セミ捕り・幼虫との出会いなど、いろいろな小さな虫との日常のかかわりに加えて、見たり感じたことを体や言葉で表現したり、遊びに取り入れることで、小動物の生態をより具体的に知り、命の重さを感じるようになることを捉えることができた。
- ・子どもは園での感動体験や日常の感動や、疑問・興味をもったことを友達や大人に伝えることで、より興味・関心をもち探究心を深めることができる。自然体験が少なくなってきた親が増えていますが、家庭でも子どもの言葉を受け止めて共感することは重要である。子どもの科学の芽は、「認め、共感する」ことで大きく育つと考える。家庭の教育力を引き上げ、園と共に協力し合って子どもの育ちを助けるために、親の感性を呼び起こし、子どもの気持ちに添うことができるような保護者の参加の仕方を工夫してきた。
- ・2年間を通して、保護者が小動物集めに協力してくれたり「いきものランド」に間接的にかかわったりして、子どもの感動に共感する姿が見られるようになってきた。

みどころ

日常の小動物とのかかわりが、それぞれの生き物に親しみを感じるまでになり、その思いを絵や遊びに表現することで、また更によく見たり知ろうとしたりする気持ちを引き起こしています。こうした「もっとよく見たい」「もっとよく知りたい」という思いをもって、表現したり遊びを考え創り出したりすることは、「科学する心」の育ちにつながる大切な経験です。